



このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

社会心理学・再入門

ブレイクスルーを生んだ12の研究

樋口匡貴

本書は12の古典研究を取り上げ、それが実施された時代背景とともに詳細に解説した本です。多くの人が一度は聞いたことがある有名な実験も、その細部には様々な工夫がなされています。教科書による概要把握だけでは知ることができないような古典研究の細部を本書は示してくれています。

ただもちろん、それだけならば原典を直接読んだ方が良いでしょう。本書の最大の特徴は、古典研究がその後どのような研究領域を産み出したのかを詳述している点にあります。例えばビブ・ラタネ

による巧みな実験によって有名になった援助行動における傍観者効果の現象は、近年社会的アイデンティティという観点から再検討されつつあることなどは知らない人も多いかもしれません。

「社会心理学・再入門」と題された本書は、古典を入り口とし、その領域にまさに再び入門することができる良書と言えるでしょう。

最後に質問です。上記の社会的アイデンティティの観点からの傍観者効果の研究で、実験で利用されたスポーツはさて一体何でしょうか？ 答えは本書の12章で！



監訳 樋口匡貴・藤島喜嗣
 発行 新曜社
 A5判 / 288頁
 定価 本体2,900円＋税
 発行年月 2017年9月

ひぐち まさたか
 上智大学総合人間科学部教授。専門は社会心理学、健康心理学。著書はほかに『恥の発生一対処過程に関する社会心理学的研究』（北大路書房）、『自己意識の感情の心理学』（分担執筆、北大路書房）、『保健と健康の心理学：ポジティブヘルスの実現』（分担執筆、ナカニシヤ出版）など。

野生チンパンジーの世界

新装版

松沢哲郎

1986年11月にシカゴで初めてジューン・グドールさんにお会いした。著書*Chimpanzees of Gombe: Patterns of behavior*の出版記念で、チンパンジー研究者が初めて一堂に会した。わたしはチンパンジー・アイの話をした。最前列で聞いていた彼女が、「ところでアイはふだんどうしているの？」とたずねた。今でいう福祉のことを聞いているのだ。「勉強が終わると仲間と一緒に運動場で暮らしています」と答えた。にっこりとほほ笑んでくれた。同年2月にギニアのボツソウに行って野

生チンパンジーの暮らしを見た。それから毎年、アフリカの野外調査と日本の認知研究を並行して進めている。雑誌『発達』に長期連載しているご縁があってこの大著を翻訳することにした。原題は「ゴンベのチンパンジー：行動パターン」とつつましいが、これ以上のものはないほどに、野生チンパンジーのことなら何でも書いてある。原著出版から30年たってもまったく色あせない。このたび、彼女のコスモス賞の受賞に合わせて新装再刊された。ぜひ多くの方に手に取ってほしい本である。



監訳 杉山幸丸・松沢哲郎
 発行 ミネルヴァ書房
 B5判 / 658頁
 定価 本体9,000円＋税
 発行年月 2017年12月

まつざわ てつろう
 京都大学高等研究院特別教授。専門は霊長類学、心理学、比較認知科学。著書はほかに『想像するちから：チンパンジーが教えてくれた人間の心』（岩波書店）、『おかあさんになったアイ』（講談社学術文庫）、『進化の隣人ヒトとチンパンジー』（岩波新書）、『チンパンジーの心』（岩波現代文庫）、『チンパンジーはちんぼんじん』（岩波ジュニア新書）など。